

## マチュピチュ・インカ文明への鉄路の旅

アンデス山塊の頂に残る世界遺産「マチュピチュ遺跡」の存在を初めて知った時、誰しもそのロマンと非現実性にしばし驚ろかされる。文字を持たなかったインカ人の文化と歴史は秘密のベールに包まれていたが、1911年のある日、突然アメリカ人考古学者によってこの空中都市が白日の下に晒け出された。険しい山頂まで歩いて登るのは、今日でも中々難儀である。後世の人たちは観光客をこの世界遺産へ案内するために鉄路を開いてくれた。おかげでペルー滞在の僅かな合間にマチュピチュを訪れることが出来る。

首都リマから国内線で草原のクスコ空港へ飛ぶ。標高3,360mの台地にあるインカ帝国の首都・クスコもまた世界遺産都市として世界的に知られている。インカ帝国時代からスペインの圧制時代を経て、網の目のように張りめぐらされた狭い石畳の道の両側に、精緻なまでに石組みされた堅牢な石垣が、高度なインカ文明を証明している。

朝6時過ぎに観光客で満載のディーゼルカーが朝もやのクスコ駅を離れる。延々100kmの道のりを7輛編成のディーゼルはゆっくり世界遺産を目指す。途中駅でケーブルをまとった女たちが、子どもまで背負ってわれ先に列車へ近づいては、果物や駄菓子、素朴な民芸品の押し売りをやっている。中には列車に乗り込んで、次の停車場まで商売している口八丁手八丁の威勢のいいインディオもいる。泥水で濁ったウルバンバ川に沿って小石と砂礫、雑草の生い茂った丘陵地帯を、起伏を繰り返しながら「失われたインカ帝国」のふるさとへ近づいて行く。3時間半ほどして漸く遺跡の足下、アグアス・カリエンテス駅へ到着する。ところがここがなんとクスコより標高が低いのだ。私は登ってきたと思っていたが、そうではなく逆に随分降っていたのだ。なんか妙な錯覚に陥る。

ほとんどの乗客が一斉に列車を降りるや、素早く目の前のバスに乗り込んだ。数珠つなぎになったバスが、山頂目掛けて急峻なつづら坂を登り始め高度400mを一気に稼ぐ。やがて辿り着いた標高2,280mの尾根に、あの天界の「マチュピチュ遺跡」が存在する。遙か山すそを見下ろしても人家も見えない、人里離れた「失われた」天上の都なのだ。幾重にも重なった苔むす石垣は、われわれ現代人に何を語りかけているのだろうか。悠久のインカ文明を想い、爽やかなブリーズに吹かれていると、頭上に舞うコンドルが民族楽器ケイナの調べに乗って、一瞬遙かなインカの世界へいざなってくれるような気がした。